尾崎紅葉集

新日本古典文学大系 明治

新日本古典文学大系 明治編

尾崎紅葉集

須田千里
松村友視 校注

江苏工业学院图书馆
藏书章

岩波書店刊行

尾崎紅葉集

新日本古典文学大系 明治編 19

二〇〇三年七月三〇日 第一刷発行

校注者 須田千里（すだちさと） 松村友視（まつむらともみ）

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 案内 〇三-五二一〇-四〇〇〇
http://www.iwanami.co.jp/

© 須田千里・松村友視 二〇〇三

Printed in Japan
ISBN4-00-240219-3

凡例

一　底本はそれぞれ次の通りである。

『二人比丘尼色懺悔』　叢書『新著百種』第一号（明治二十二年四月一日、吉岡書籍店）に掲載された初出。

『紅子戯語』　硯友社発行の雑誌『我楽多文庫』第十号（明治二十一年十月二十五日）、第十一号（同年十一月十日）、第十二号（同月二十五日）、第十三号（同年十二月十日）に掲載された初出。

『恋山賤』　作品集『初時雨』（叢書『小説群芳』第一、明治二十二年十二月十日、昌盛堂）の初版。

『おぼろ舟』　単行本『二人女』（明治二十五年二月二十日、春陽堂）の初版。

『二人女房』　雑誌『太陽』（博文館創業十週年紀念臨時増刊、明治三十年六月十五日）に収録された再掲本文。

『心の闇』　単行本『心の闇』（明治二十七年五月一日、春陽堂）の初版。

二　本文表記は句読点、符号、仮名遣い、送り仮名、改行など、基本的に底本に従った。ただし、誤記や誤植、脱落と思われるものは、校注者による判断、および単行本や全集など他本によって訂正し、あるいは補った。その際、必要に応じて脚注で原文を示した。

1　句読点

（イ）　句読点（、　。）は原則として底本のままとした。

（ロ）　『紅子戯語』の「自叙」は、校注者の判断により適宜句間を空けた。

2　符号

（イ）反復記号（〻 〼 〽 〲 〱 々など）は原則として底本のままとした。

（ロ）圏点（。 ● ・）、傍線などは底本のままとした。

（ハ）「 」『 』（ ）《 》は原則として底本のままとした。

（ニ）……は原則として底本のままとした。

3　振り仮名

（イ）原則として底本のままとした。

（ロ）校注者による振り仮名は（ ）内に歴史的仮名遣いによって示した。

4　字体

（イ）漢字・仮名ともに、原則として現在通行の字体に改め、常用漢字表にある文字はその字体を用いた。

（例）撿→検　搆→構　姉→姉　銕→鉄　摸→模

例外的に底本の字体をそのまま残したものもある。

（例）烟（煙）　躰（体）　燈（灯）　峯（峰）　飜（翻）

（ロ）当時の慣用的な字遣いや当て字は、原則としてそのまま残し、必要に応じて注を付した。

5　仮名遣い・清濁

（イ）仮名遣いは底本のままとした。

（ロ）仮名の清濁は、校注者において補正した。ただし、清濁が当時と現代で異なる場合には、底本の清濁を保存し、必要に応じて注を付した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6　改行後の文頭は、原則的に一字下げを施した。

7　明らかな誤字・脱字は適宜補正し、必要に応じて注を付した。

三　本巻中には、今日の人権意識に照らして不適当な表現・語句がある。これらは、現在使用すべきことばではないが、原文の歴史性を考慮してそのままとした。

四　脚注

1　脚注は、語釈や人名・地名・風俗および文意の取りにくい箇所のほか、懸詞、縁語などの修辞、当て字など、解釈上参考となる事項に施した。

2　脚注で十分に解説し得ないものに、↓を付し、補注で詳述した。

3　本文や脚注を参照する際には、頁数と行、注番号によって示した。

4　引用文には、読みやすさを考慮して適宜濁点を付し、漢文は可能な限り仮名交じりの読み下し文とした。原文にある圏点や傍線は割愛した。

5　作品の成立・推敲過程上注目すべき主要な点に、他本との校異注を付した。

6　必要に応じて語句や表現についての用例を示した。

目次

凡例……3
二人比丘尼色懺悔……一
紅子戯語……六五
恋山賤……一〇五
おぼろ舟……一三
二人女房……一九
心の闇……三七
補注……四一

付　録

『おぼろ舟』関連略図……四七六
『心の闇』関連略図……四七七

解　説

恋のかたち……須田千里……四八一
『紅子戯語』『恋山賤』『二人女房』解説……松村友視……四九

二人比丘尼（にんびくに）色懺悔（いろざんげ）

須田千里 校注

『新著百種 第一号』初版本表紙

〔**初出・底本**〕一冊読み切りの叢書『新著百種』の第一号（明治二十二年四月一日、吉岡書籍店、定価十二銭）に発表。本巻ではその初版を底本とした。巻頭に春のや生（坪内逍遙）の「新著百種序」（シリーズ全体の序文にあたる）、本文中に大蘇芳年・松岡緑芽・渡辺省亭による三葉の挿絵を挿入。「奇遇の巻」以下の各巻頭には、経机・兜・振袖・鞘巻の画を藤色で重ね刷り。

〔**諸本・全集**〕本書は版を重ね、明治二十二年六月十日に再版、誤記・誤植などが訂正された（脚注では〈重版〉と略記）。同年十二月十五日に五版を発行。のち、『新著百種 傑作集 一』（明治二十四年十一月二十九日、吉岡書籍店・学齢館）に、饗庭篁村「堀出し物」、思案外史「乙女心」、紅葉山人「風雅娘」とともに本文を新たに組み直して再録。博文館版『紅葉全集』第一巻（明治三十七年一月。脚注では〈全集〉と略記）に収録。ここでは特に「奇遇の巻」に大きな異同が見られる。岩波書店版『紅葉全集』第一巻（平成六年三月）に収録。

〔**成立**〕公売本『我楽多文庫』第十五号（明治二十二年一月二十五日）予告に「紅葉山人著作／二人色懺悔／二月下旬出板」、十六号（二月十日）の広告では三月五日発行とあったが（三月十一日・二十五日発行の『文庫』十七・十八号も同様）、執筆の遅れから発行は延引し、十九号（四月十二日）に「謝罪広告」が掲載された。

〔**梗概**〕木枯らしの吹く片山里の庵に一夜の宿を求めた尼は、主の尼（若葉）も自分同様夫に先立たれたことを知り、身の上を語り始める。彼女（芳野）の許婚・浦松小四郎守真は、討死を期した戦場で生き残り、今は敵方となっている伯父遠山左近之助武重に説得されてその館に引き取られる。館で小四郎を看護する芳野は、別の女性（若葉）と結婚した小四郎に怨み言を言う。小四郎は、芳野から味方の敗軍を聞き、彼女の立ち去った後に自害する。聞き終えた若葉は相手の正体に気づき、互いに驚く。

〔**構想**〕仮名草子『二人比丘尼』、御伽草子『三人法師』、軍記『信長記』『太平記』、井原西鶴『好色一代女』などから材を得たほか、文体や語彙に人情本や浄瑠璃・歌舞伎の影響が認められる。

〔**評価**〕尾崎紅葉の出世作であり、同時代評も多い。脚注では適宜略称で示した（補注二・三・一一・一六・二三・二五を参照）。作者の主眼とした悲哀に賛辞が寄せられる一方、時代考証の杜撰や登場人物の性格の平板さ、結構の齟齬、芝居めいた文体、……の多用に対する批判が目立つ。

〔**校訂付記**〕本文には、一字―数字分の空白やカタカナ表記が見られるが、底本のままとした。

自序

二人比丘尼色懺悔成る　例の九華。香夢楼思案麻渓漣眉山等わが机をとりまき。言葉よりまづ大口あいて笑ひ。　爾紅葉。　若気のいたりからまた〳〵好色の書を著はすか。　喝爾等鞘の塗で兼光か竹光か。判断がなるか。そも色懺悔を題にして妙齢の比丘尼二人が山中の庵室に奇遇し。古を語り今を墓なみあふといふ脚色。一字一涙の大著作即ち是と。薄汚なき原稿をさし出せば手にだも触れず腹を抱え。　扨も企図のしほらしさよ。心根のふびんさよ。茶番狂言の飯炊場が。情なからうか悲しからうか。尺八に似た火吹竹。いかなる音をやいだすらむ。爾性諧謔。爾口善罵。なぐり書の滑稽もの或は怪我の功名に。見らるゝもの出来すやも計られず。爾が悲哀小説――盲人が染小袖の是非。其器にあらずして之を言ふは間違へるなり。鴟鴞は済を過ぎず。貔は汶を渡つて死す。鳥の知に如かざる紅葉。毛物の愚に似たる悪太郎。労して物笑ひの種となるとも。我等が知る所にあらず。

我知る処なり。爾等が知る処に非ず。向横町の東坡きのふ我に教へていふ。貧家は浄く地を掃き。貧女は巧に頭を梳る。ずいぶん骨を折てやつて見なさい

一 出家して戒を受けた女子。尼。　二 以下に挙げられた六名は、硯友社社員として尾崎紅葉と親しい人物。→補一。　三 具体的に何か不明だが、『風流 京人形』(『我楽多文庫』『文庫』一―十八、明治二十一年五月―二十二年三月)、『YES AND NO.』(『我楽多文庫』十四、同二十二年一月)などを指すか。→補二。　四 「喝」は一声どなりつけること。紅葉の反論。　五 鎌倉末期の刀工。備前長船の人。「正面の床の間には父が遺愛の備前兼光の一刀を飾り」(徳冨蘆花『不如帰』中篇一の二、明治三十三年刊)。　六 竹を削って刀身にみせかけたもの。鞘に入ったままでは名刀か竹光かわからないのと同様、題名だけでは内容はわからない、の意。　七 →補三。　八 「儚み」のあて字。頼りなく思う。「女こゝろの墓なや。あふべきたよりもなければ」(井原西鶴『好色五人女』巻四「世に見をさめの桜」、貞享三年)。　九 「しくみ…(二)芝居二、狂言ノ趣向。脚色」(大槻文彦『言海』明治二十二―二十四年)。　一〇 →六頁注二。→補四。　一一 →補五。　一二 大笑いするさま。この直後の空白については解題「校訂付記」参照。　一三 けなげで感心なこと。ここでは皮肉の意をこめる。　一四 不憫。　一五 →補六。　一六 火をおこすのに使う竹筒。「飯炊場」の縁語。　一七 どんな内容だろう、きっと大したものではあるまい、の意。「音」は「尺八」の縁語。　一八 お前は生まれつきおどけ者だし、お前の口は巧みに人を罵る、だから読者を泣かせるような作品を書けるわけがない。「諧」は底本「譴」(音ク。うその意)。意改(四頁一行目も同じ)。　一九 もしこれが乱暴に書いた滑稽な作品なら、怪我の功名で読むに足るものとなるかも知れないが。　二〇 →補七。　二一 目の見えない者が染小袖の良し悪しを判断

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と。これわが宗旨ちがひの小説を試むる所以なり。われ諧謔自ら喜べど涙なきに非ず。口よく罵れど慰言なきにあらず。[二]さては力を尽さば縦鼻横目のすなる事。などか我のみならざらむ。英国の[四]シェークスピアといふは。鬼にもあらず神にもあらずして。[五]一枝の筆に万象の[六]人情世態を写して。泣くやうにも笑ふやうにも得書しと聞く。[七]かれは富家にして下男に掃かしめ。富女にして髪結に梳づらしむるものなれば。[九]手細工の及ぶべきにあらざれど。紅葉果して涙なきか。須らくこの書発市の暁を待て世の看官に問ふべし。[一〇]淵を素通りしてその底に蛟龍の捜むを見るか。[一三]林を一目してその奥に桐檀のあるを知るか。[一四]麁忽ばしのたまふなと咳二ツ三ツ。[一六]　一同嘲笑していふ。天水桶には蛟龍湧かず。[一七]芋畠には桐檀生えず。紅葉爾が非望の著作は。[一八]蛟龍を天水桶に覓めて底をぬき。[一九]桐檀を芋畠に探して地を荒らす。[二〇]笑止〳〵と帰りゆく。紅葉その影遠くなるまで見送り。やがて二三尺とびすさつて衣紋かいつくろひ。[二一]大方の君子に向つて合掌再拝して曰。[二二]拙劣の才学もとより変幻の人情を写すに。[二三]万分一さへうべからざるを信ず。[二四]世間の蜆わが門前の蛤今ほざいたる誇大の過言は。[二五]人を見下し罵詈に対する一図の肝癪。[二六]ほんの内〻だけの高話。[二七]真平御免下さるべし。もし方〻に悪まれ奉り。[二八]色懺悔を見てかなしがり涙を落すものは。[二九]書肆の主人できないように、悲哀小説を書く能力もないお前が、自分から「悲哀小説」などと言うのは間違っている。「染小袖」は模様や色を染め付けた小袖。[三]→補八。[三]分もわきまえず悲哀小説などと言う紅葉は、自分の居場所を知っていた鴟鴞の知恵にも及ばない。[三]獣。汶を渡って死んだ貂を指す。[三]紅葉の別号の一つ。本作品以前では「是は近頃大評判の雑誌」(活版公売本『我楽多文庫』十一号、明治二十一年十一月)がこの署名。「悪太郎」は、いたずら小僧の意。[三]以下、紅葉の反論。世間の物笑いになるのは自分であって、お前たちの知ったことではない、の意。[三]→補九。[三]「貧家は浄く地を掃(はら)ひ、貧女は好く頭を梳(けづ)る」(蘇軾「貧家浄掃地」『蘇東坡詩集』巻四十二)を踏まえる。内実が貧弱でも、工夫次第でそれを取り繕うことができる、の意。[三]精一杯。

以上三頁

一　慰めの言葉。
二　そうであるからには。
三　(鼻が縦に、目が横に付いていることから)人間。人間のするということで、自分にだけできないことはない、の意。
四　劇作家。詩人。一五四―一六一六。→補一〇。
五　一本の筆。
六　あらゆる姿。
七　書くことができた。
八　三頁一五行目の「貧家」と対照的な富裕な家の例。シェイクスピア作品を喩える。
九　素人の細工仕事。自分の作品を喩える。
一〇　発売。
一一　読者。「看官(てう)」(為永春水『春色辰巳園』三編巻之九第五条、天保六年)。
一二　上っ面を見ただけでは物事の本質はわから

ばかりなどの悪評。かの五人の耳にいらば。むごらしやわれは彼等が為に罵殺せられむ。他人にむかつてならば。悪口雑言御心まかせ。たゞ五人へは。コレひそかに〳〵

明治廿二年小草生月戯作堂の南軒に　紅葉山人戯誌

ない、の意。「蛟龍」は、水中に潜み、雲雨に乗じて天上し龍になるという中国古代の想像上の動物。次の文も同じ意。一三「棲」に同じ。

一四 香木。白檀。

一五 決して軽はずみなことをおっしゃいますな。「ばし」は強意。

一六 もったいぶって咳払いするさま。

一七 「雨樋ヨリ導キテ天水ヲ貯ヘ置ク大桶、火災ヲ防グ備ヘトス」(『言海』)。ボウフラが湧く。

一八 分不相応な望み。

一九 天水桶の底を突き破り。

二〇 ああおかしい。

二一 後ろへ飛び退く。恐れ入るさま。「有難く頭戴(だい)せよと。渡し給へば義興公。ウハ、、はつと飛しさり。家の面目身の冥加」(平賀源内『神霊矢口渡』初段、明和七年初演)。

二二 襟をかき合わせるなどして着くずれを直す。

二三 「(二)世間一般ノ人」(山田美妙『日本大辞書』明治二十五―二十六年)。読者。

二四 自分の家では威張っているが、外に出ると小さくなってしまうことの喩え。

二五 「一途」に同じ。ひたすら。

二六 仲間内だけでの威勢のいい話。

二七 「平(ヘ)ニ。…「ーオユルシ」」(『言海』)。「取て返しておわび言(ご)。真平御免下され」(二世竹田出雲ら『義経千本桜』椎の木の段、延享四年初演)。

二八 発行元。『新著百種』の発行者吉岡哲太郎を指す。

二九 冒頭の九華以下眉山までを指す。「六人」の誤り。

三〇 「憐ムベシ。…ムゴタラシ」(『言海』)。

三一 罵倒。「殺」は意味を強める助辞。

三二 陰暦二月の異名。

一作者曰

一　此小説は涙を主眼とす[一]

一　時代を説かず場所を定めず。日本小説に此類少し。[四]いかなる味の物かと好心に試みたり。難者あらば。ある時ある処にて。ある人々の身の上譚と答ふべし[五]

一　文章は在来の雅俗折衷おかしからず。言文一致このもしからずで。色々気を揉みぬいた末。鳳か鶏か——虎か猫か。我にも判断のならぬかゝる一[七]風異様の文体を創造せり。[八]あまりお手柄な話にあらずといへど。これでも作者の苦労はいかばかり。それをすこしは汲分て。[一二]御評判を願ふ[一三]

一　対話は浄瑠璃体に今時の俗話調を混じたるものなり。惟みるに。これを以て時代小説の談話体にせんとの作者の野心[一五]

一　前述の通り。世間在来の文とは。下手なりにも趣を異にすれば。読人一見してつらいといふ。[一六]作者は少しもつらからず。我つらからざるを人々何ゆへにつらしといふや。[一七]専ら句読をたよりに再読の御面倒を請ふ

月日　紅葉山人

一凡例に当たる文章。饗庭篁村『堀出し物』(『新著百種』二号、明治二十二年五月)の「作者曰」、石橋思案『乙女心』(『新著百種』三号、明治二十二年六月)の「作者曰」「見物曰」などはこれを踏まえている。

二坪内逍遙『小説神髄』(明治十八—十九年)の「小説の主脳は人情なり世態風俗これに次ぐ」(「小説の主眼」)を踏まえた表現。

三特に時代を定めないこと。↓補一一。

四底本の振り仮名「にぼん」。「つ」を補う。

五どんな具合かと、物好きな気持で。

六非難する者。

七雅語(文語体)と俗語(口語体)を適当に混ぜた文体。↓補一二。八満足できない。

九話し言葉に近い形で書かれた文体。↓補一三。

一〇鳳のように立派な文体(雅)か、鶏のように身近な文体(俗)か。「鳳」は古代中国のめでたい鳥。

一一↓補一四。

一二「斟酌」(『言海』)。

一三よい評判を立てること。

一四浄瑠璃の七五調を基調とした文体。↓補一五。

一五「既往の事蹟を本として若(もし)くは歴史上の人物を主人公となして以(も)て一篇の脚色(しくみ)を構へ」(『小説神髄』上「小説の種類」)た小説。

一六読みづらい。わかりにくい。

一七句読点。文章の意味の切れ続きを明らかに知るために用いる補助記号。本作では「。」。

一八庵の主人の尼と、その庵に一夜宿った尼が、実は同じ男性を愛していたという奇縁を指す。

一九五老井許六編『風俗文選』(宝永三年)巻三所収「百花譜」のうち、「罌粟」の全文。↓補一六。

二人比丘尼 色懺悔

紅葉山人著

発端 奇遇の巻

一九 罌粟は眉目容すぐれ髪長し。常は西施が鏡を愛して二〇 粧台に眠り。二一 後世なんどの事は露ばかりも心にかけぬ身の。一念の恨によりて。二二 ごそと二三 剃こぼして尼になりたるこそ。二四 肝つぶるゝ業なれ……百花譜——二五 許

六

二六 都さへ……蕭条いかに二七 片山里の時雨あと。晨から夕まで昨日も今日も木枯の吹通して。あるほどの木々の葉——峯の松ばかりを残して——大方をふき落したれば。二八 山は面瘠て哀れに。森は骨立ちて凄まし

二九 茶の煙だにあがらずば。三〇 山賤も知らぬ。谷陰に誰がすむ庵。三一 かくてもなを捨難き浮世の面影のこす三二 菱垣。疎らに結ひ繞らし。竹は虫食み縄朽ちたれど。枯蔦の名残惜しく三三 取組るまゝ流石に倒れもやらず。三四 二本の黒木を三五 入口のしるしばかり。三六 茅葺の屋根は歳に黒み。三七 落懸る三八 檐風に傷はしく。風情は月にばか

二〇 中国春秋時代の美人の名。二一 化粧台に寄りかかって眠り。「粧台」「鏡」は縁語。

二二 仏道に帰依して来世の安楽を願うなどのことは、全く気にしない身が。現世の恋に夢中になっているさま。

二三 ごっそり黒髪を剃り落として尼になる。罌粟の花が散り落ちてケシ坊主になるさまを喩え、本作品の二人の尼の身の上に重ねる。「尼になりたるは祇王仏なりとの事をも思ひ合はすべし」(馬場錦江『風俗文選通釈』安政五年序)。

二四 びっくりすることだ。

二五 森川氏。一六五六―一七一五。芭蕉晩年の門人。蕉門十哲の一。

二六 晩秋は都でさえ寂しいのに、まして片山里の寂しさはいかばかりか、思いやられる、の意。→補一七。二七 「偏鄙ナル山里」(『平家物語』巻二「大納言ながされの事」、延宝五年刊本)。

二八 擬人法。特に山田美妙を意識し、彼から学んだもの。「衣服(のぎ)を剝がれたので痩肱(ひじ)に瘤(こぶ)を立てゝ居る柿の梢には」(山田美妙『武蔵野』中、明治二十一年)。

二九 →補一八。

三〇 きこりなど、山里に住む身分の低い者。

三一 『徒然草』第十一段を踏まえる。→補一九。

三二 割り竹をひし形に組んで結った垣。「借宅の軒に竹の菱垣ゆひまはして」(『西鶴織留』巻四の二、元禄七年)。

三三 〈全集〉「縋れるまゝに倒れもやらず。」。

三四 製材していない、皮のついたままの材木。

三五 〈全集〉「標(しるし)に」。

三六 朽ちて落ちかかった檐は、風に吹き破られるかと心配で。三七 風情と言えるのは壁の破れ目から射し入る月の光ばかり。

りの破壁。強くはふめぬ竹椽。切株の履脱から左へ三尺。其処に筧の水……水ほどにもなく絶えせぬ雫。阿伽桶に滴る音。やう〳〵幽に疎らになるは。樋の口凍るにや――夕暮の風寒し。　麓路に梅香りて――扨は春。窓外の山白くなれば。冬ぞと知る。　此処には暦日なく。昼は伐木の音にくれ。夜は猿の声に更け。鐘も鶏も。響かず聞えず。恋する身には。上もなき隠れ家……なれど愛欲を棄てかゝらねば。一日仮の住居も難し。　夕日影木末に薄らぎ。反古張の障子赤くなれば。程なく鉦の音其内に。　何処よりか来たる法衣の人。塗笠目深く冠りて。門に立休らひ　（頼む）と音なふは女の声。鉦の音絶て。障子の外に現はれしも法体の女。鼠木綿の布子に黒染の腰法衣。頭巾着たるが門外を窺ひ。

（何御用で御坐ります）

（行脚の比丘尼で御坐りますが。慣れぬ山路に迷ひまして難義を致します。御無心ながら一夜の宿りを願ひたく。御看経のお邪魔を致しました）　寒気に慄く声

（御覧の通りの茅屋。夜の物とて御坐りませんが。お厭ひなくばさア……さアおは入遊ばしまし）

一 割った竹を並べて作った濡れ縁。二 木の切り株をくつ脱ぎに用いたもの。三 竹や木を地上に掛け渡して、水を導くようにした樋。〈全集〉「寛の。水ほどにもなく」。四 閼伽（仏に供える水）を汲み入れて持ち運ぶための手桶。〈全集〉「閼伽桶」。五 〈全集〉「にやあらん。夕暮の」。六 「開（ひら）ける梅暦（ばい）に春を覚え、青山（ざん）かはつて白雪（ゆき）の埋む時冬とはしられぬ」（井原西鶴『好色一代女』巻一「老女の隠れ家、貞享三年）を踏まえる。七 「わづかに事とふものとては、しづがつま木のをのゝおと、木づたふさるのさけぶこゑ」（鈴木正三『二人比丘尼』下）を踏まえる。八 人里離れていることを示す。→補二〇。九 〈全集〉「此上（よ）なき」。一〇 「老女の隠れ家」（→注六）を踏まえる。〈全集〉「隠れ家に似たれども。愛欲を棄てずしては。」。一一 反古（書画など書き損じて無用になった紙）で張った障子。「反古張（ほうぐ）の明（あか）障子」（文耕堂ら『ひらがな盛衰記』第四、元文四年初演）。一二 〈全集〉「内に鉦鼓の声す。」。一三 〈重版〉「……法衣の人」。〈全集〉「来にけん法衣の人」。→補二一。一四 薄い板に紙を張り、漆塗りにした笠。多く女がかぶる。→次頁挿絵。一五 〈全集〉「目深に打冠りて。此門に休らひ。」。一六 「（一）人家ノ門ニテ案内ヲ乞フ」（『言海』）。一七 〈全集〉「息（そ）みて。」。一八 出家姿。一九 〈全集〉「女人（にょ）。」。二〇 ねずみ色の木綿の綿入れ。二一 「墨染」の誤りとも考えられるが、底本・〈全集〉のまま。二二 「腰衣　僧衣（ゾウエ）ノ甚ダ短クシテ黒キモノ、腰ニ絡フ」（『言海』）。「鼠の単物（ものよ）を着、腰衣を着けた六十歳（いろよ）近い尼が」（三遊亭円朝『真景累ケ淵』八十六、安政六年作、明治二十一年五月、薫志堂）。二三 〈全集〉「ござります。」。以下、おおむね同

客の比丘尼は凍る手のもどかしく。笠の紐とく〳〵椽に立寄り。草鞋とつて主人が勧むる微温湯に足を濯ぎ。導かれて炉に近く坐を占め。初対面の挨拶。やがて渋茶一椀。饗応ぶりにさしくべる榾の。焚上る炎に客は背ける顔。主人は何心なく見るに。俗に在りし昔の我ならば。ねたましく思ふほどの容色。今さへも見て。臭骸の上を粧ふて是とは覚えず——地水火風空も。よく形造らるればかほどの物か。自分は二十一歳。二ツばかりは少かる可し。此眉目容姿——この年頃。菩提の種には何がなりし。まだ爪紅の消え切らぬ指に。珠数つまぐる殊勝さ……過て哀れなり。我身に思ひ較べて。うるむ涙を。炉の榾掻動かして。烟しと擬らはす。

客も主人を見れば。世に捨らるべき姿かは。世に飽くといふ年かは。或は我に似たる身のなれる果か。聞かせたし語らせたし。我が事人の事。

様。→補一七。二四〈全集〉「是は行脚の比丘尼。慣れぬ。」『二人比丘尼』下〔→注七〕に「是はあんぎやのびくにこそ候が、まみへ申したき心ざし候て」とある。二五〈全集〉「迷ひ。難義を」。二六「(二)心無ク人ニ物ヲ望ムコト」(『日本大辞書』俗語)。「御無心ながら、火ひとつかしておくれんか」(十返舎一九『東海道中膝栗毛』文化元―六年)五編下)。二七〈全集〉「御願ひに。」。二八「声無クシテ読経スルコト」(『言海』)。二九底本振り仮名「さむき」。五八頁二行目を参照して改。三〇夜具。三一〈全集〉「さゝお入遊ばせや。」。三二笠の紐を「解く」と、「疾く」(早く)椽に立ち寄る意の掛詞。三三〈全集〉「草鞋とつて」を削除。三四〈全集〉「疲れし足を」。三五「煎(ニ)カラシテ、味渋クナレル茶」(『言海』)。三六もてなそうとする態度。ここでは火をたいて客に暖を取らせること。三七「ほた…木ノ切端。薪トス」(『言海』)。三八〈全集〉「背くる顔を。」。三九「(一)僧ノ境涯ヨリ、世間(ナカ)ノ人ヲ呼ブ称」(『言海』)。四〇〈全集〉「げに可妬(ねた)しき其の容色。」。四一〈全集〉「今も」。四二「臭骸」は悪臭を放つ死体。仏教で多く女性の肉体を見立てる。「男(ハ)女の淫楽は互に臭骸を懐くといへるも」(『好色一代女』巻五「小哥の伝授女」)。この下に臭骸を隠しているとは思えない美しさだ、の意。四三〈全集〉では「かほどの物か。」まで削除。「地水火風空」は、仏教で言う物質構成の五つの要素。五大。四四〈全集〉「おのれは」。四五仏道に入るきっかけ。「是を菩提の種として娑婆の絆をはなれつゝ」(岡清兵衛『頼光跡目論』第二、寛

絵　庵を訪れる尼の姿。画者は大蘇(はじめ月岡)芳年(一八三六―九二)。→補二二。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com